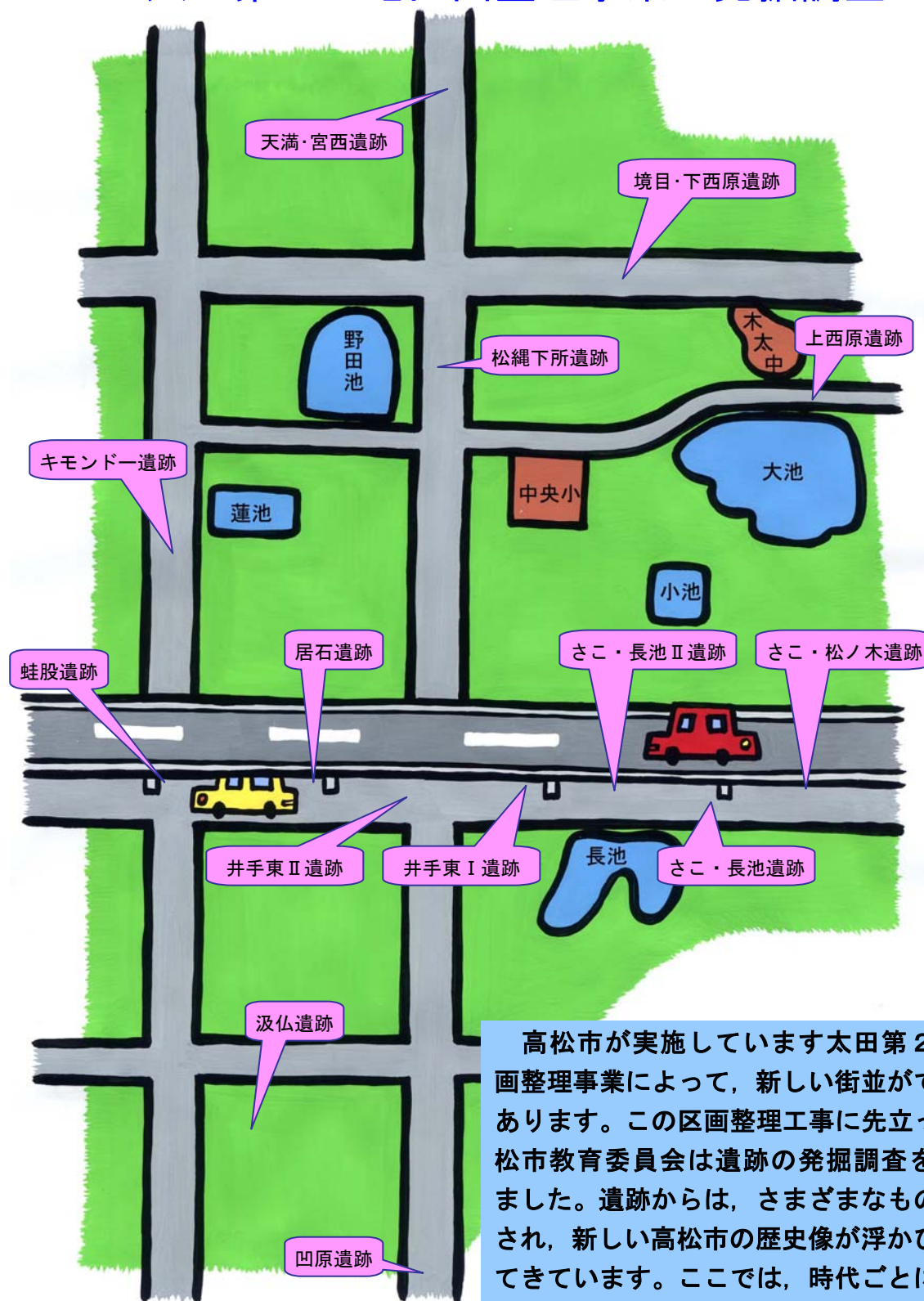


むかしの高松

2004.3
第17号

太田第2土地区画整理事業と発掘調査



高松市が実施しています太田第2土地区画整理事業によって、新しい街並ができつつあります。この区画整理工事に先立って、高松市教育委員会は遺跡の発掘調査を行いました。遺跡からは、さまざまなものが発見され、新しい高松市の歴史像が浮かび上がってきています。ここでは、時代ごとに発掘されたものを見ていきましょう。

縄文時代

縄文時代は、狩猟や採集を生活の中心としていた時代です。



現在、区画整理地内で見ついているものうち、もっとも古い時期が縄文時代です。居石遺跡おりいしの古い川跡からは、縄文時代でももっとも新しい時期（晩期）の土器や石器そして木器が見つっています。家の跡は見つかりませんが、きっと近くにムラがあったのでしょう。



縄文土器 居石遺跡《伏石町》出土

一番奥が深鉢（ふかばち）で、ほかは浅鉢（あさばち）と呼ばれています。煤（すす）が付いていることから、煮炊きに使われていたのでしょう。



木材 居石遺跡《伏石町》出土

木材を加工して、木器を作る工程がわかる資料です。①丸太を必要な長さに切り、②縦に半分に割り、③道具の形に削っていきます。③は斧の柄を作っている途中のものです。

アカホヤ火山灰

この火山灰は、今から約 6,300 年前（縄文時代早期）に、南九州沖の鬼界カルデラ（鹿児島県）と呼ばれる海底火山が大噴火を起こ



火山灰堆積状況 井手東 I 遺跡《伏石町》
中央の白い帯がアカホヤ火山灰。

して飛び散ったものです。風にのり、東日本まで運ばれました。井手東 I 遺跡いでひがしでは、くぼ地に火山灰が厚さ数十cm積もった状態で発見されており、火山噴火のすさまじさを伝えています。

火山から高松まで約 500 km も火山灰が飛んできたんだよ。



弥生時代

弥生時代は、米作りが広まり、農業が生活の中心となっていく時期です。この時代の人々が生活していた跡が、もっとも多く見つかっています。そこで、4つのテーマに分けて紹介します。

住む

たてばしらたてもの
立柱建物

当時の人々は、家の広さだけ地面に穴を掘って半地下式にし、柱を立て、カヤなどを屋根にふいて家を建てていました。これをたてあなじゅうきよ竪穴住居といい、平面が円形や方形のものがあります。ほかに、地面に柱を立て、木を組んで作るほつ掘立柱建物があり、こちらは住居というより、倉庫として使われていました。



竪穴住居跡 凹原（ひっこんばら）遺跡《多肥下町》
平面は、一辺が約5mのやや丸い方形のものです。中央とその周囲4ヶ所に柱を立てていました。左手前には柱がそのまま残っています。



←竪穴住居復元図



掘立柱建物復元図→

ほうむ 葬る

弥生人も亡くなると墓に葬られました。高松で見つかった墓は、地面に穴を掘って木棺を埋めたものや、さらにその周囲に溝を掘って区画したしゅうこうぼ周溝墓と呼ばれるものがあります。また、子供の場合は、大きな土器に入れられて、地面に埋められました。



周溝墓 さこ・長池遺跡《林町》
赤い線が、墓を巡っている溝です。奥側の半分は、調査地より外です。平面は、直径約10mの円形です。



土器棺 凹原遺跡出土《多肥下町》
口縁部を打ち欠いた壺を身として、片口鉢を逆さにして蓋（ふた）にしています。高さは、約80cmあります。

使う

弥生時代の人々は、さまざまな道具を使って生活していました。考古学の研究者たちは、出土した道具を材料別に分けて呼んでいます。土器・石器・木器・金属器などです。発掘調査でもっとも多く出土するのは土器で、次いで石器が見られます。木器や金属器は、腐ったり再利用されるので、残りにくい材質です。



土器

天満・宮西遺跡
《松縄町》出土

弥生土器は、それまでの縄文土器と比べ、さまざまな種類が見られ、作りも薄く仕上げられています。写真の土器は、弥生時代でも終わり頃のもので



石器 さこ・長池遺跡《林町》出土

①は矢の先に付ける鏃（やじり）。②は槍の先に付けるもの。③は斧の刃で加工用。④も斧の刃で木を切り倒すもの。⑤はサヌカイト（安山岩）で、これを加工して石器を作っていました。⑥はナイフとして使っていたもの。⑦は石庖丁（いしぼうちょう）で、稲穂をつむものである。



木器 井手東I遺跡《伏石町》出土

①は農具で、鋤（すき）。②は祭り用のもの。③は4弦（げん）の琴。④はヘラ状のもの。⑤は斧の柄。⑥は小形の臼。⑦は物脱穀（だっこく）用の堅杵（たてぎね）。⑧は持ち手が付いた片口の容器。⑨は農具で、鍬（くわ）の刃の未製品。

耕す

弥生人の生活にとって大切な水田も発掘しています。さこ・長池Ⅱ遺跡で発掘された水田は、^{たたみ}畳約4枚分の広さしかなく、周囲を高さ約2～3cmの低いあぜがめぐっていました。これは、弥生時代には木製の刃をもった鋤や鍬しかなく、水田に水を張るために広い範囲を水平にすることが難しかったためです。このように、水田を耕すのは非常に重労働だったと考えられますが、それでも弥生人たちは、豊かな生活を求めて水田を広げていったのです。



弥生時代の水田

さこ・長池Ⅱ遺跡

《林町》

発掘調査では、全部で315枚見つかりました。中央の細長いのが水路で、水路からあふれた水がとなりの水田へ流れ、さらに水田からあふれた水が、あぜを越えて、となりの低い水田へ流れるという工夫がとられていました。

なお、この水田は弥生時代前期末に起こった洪水によって埋まってしまいました。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、他の時代に比べると発掘の件数は少ないです。ただし、平野縁辺の丘や山では多くの古墳が見られ、人が住んでいた集落の跡が将来見つかるかもしれません。

区画整理地内では、^{おりいし}居石遺跡で古墳時代前期の水路を発掘しています。川から水路に水を取り入れる水口から、下の写真の小さな鏡が3枚並んで出土しました。おそらく、水が枯れることのないように祈りをこめて置いたのでしょう。



・製鏡 居石遺跡《伏石町》出土

・製鏡（ほうせいきょう）とは、日本国内で中国鏡をまねて作られた鏡のことである。居石遺跡出土の鏡は、左から直径5.4cm・3.6cm・2.8cmと小さいタイプである。鏡は、古墳時代においては、実用品というより祭りや儀式のときに使われたと考えられています。



土師器（はじき）

居石遺跡《伏石町》出土

左の鏡といっしょに出土した土器です。

古代

奈良～平安時代の遺跡で、注目すべきは、今も高松平野に残る条里地割との関係です。高松平野を空中写真や地図で見ると、碁盤の目状に土地が区画されており、これを条里地割と呼びます。条里地割の起源は、古代において国が土地支配を容易にするため、全国へ広げた条里制が元になったと考えられています。条里制では、土地を1町（約109m）四方に分け、6町四方を一つの単位としました。

松縄下所遺跡では、条里地割から少しずれますが、条里地割と同一方向にのびる道路の跡、同じく並行する掘立柱建物跡が見つっています。出土した土器から、7世紀後半には条里地割の原型があった可能性が考えられます。

さこ・長池Ⅱ遺跡では、高松平野を2つに分けていた山田郡と香川郡の郡境（行政区画）を示す2本の溝跡（道路跡？）が見つっています。

また、ほかの遺跡の調査成果から、この条里地割は一度に作られたのではなく、古代から中世や近世にかけて少しずつ作られていったことがわかっています。

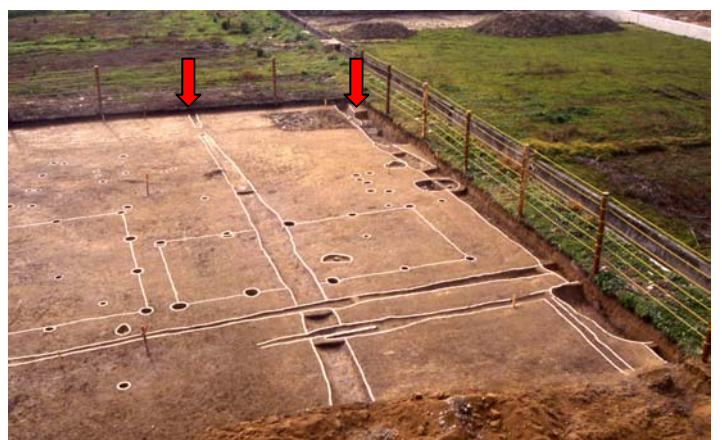


古代の道路 松縄下所遺跡《松縄町》

南北約267mにわたって、2本の溝が約2.5mの間隔で続いていました。さらに、写真中央のように、約55mごとに東西方向の道路が交わり、交差点が作られていました。道路に沿って建物跡が見つっており、かなり整然とした景観（町並み？）であったと考えられます。



高松平野に見られる条里地割



郡境の溝跡 さこ・長池Ⅱ遺跡《林町》
矢印が溝跡で、溝と溝の間は約7mあります。

中世

鎌倉～室町時代の遺跡はいくつかありますが、見つ

かっているものは小さな家の跡や水田がほとんどで、当時はのどかな田園風景が広がっていたと考えられます。そうした中であって、キモンド一遺跡で見つかった堀跡は特筆すべきものです。

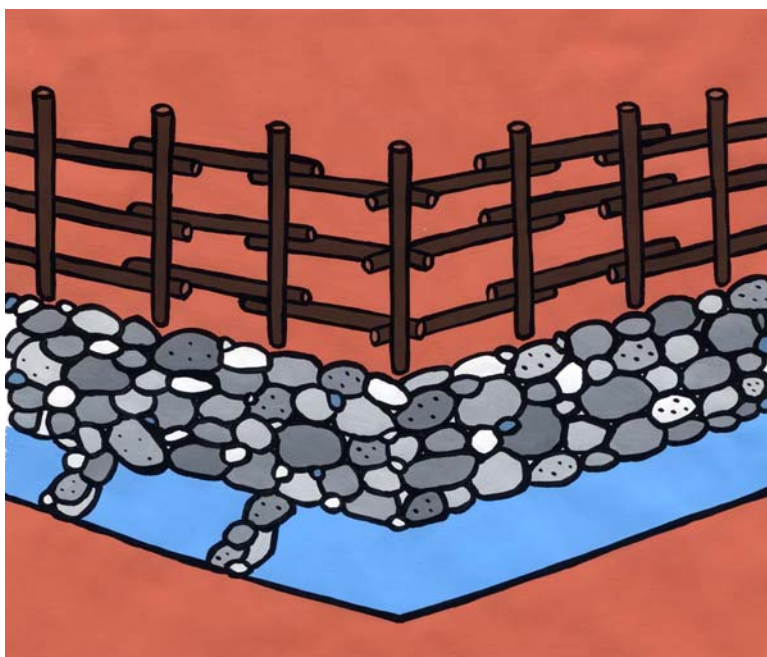
キモンド一遺跡周辺には、戦国の世に活躍した佐藤氏が住んでいた佐藤城があったといわれ、キモンドの地名は城の北東を指すといわれていました。永らく佐藤城の存在は伝承のままでしたが、発掘調査で堀跡が見つかり、その存在が明らかになったのです。

「南海治乱記」という書物によれば、佐藤氏は、高松西部を本拠地としていた香西氏に仕えていた武将であった。当主である佐藤孫七郎は、天正10年(1582)の藤尾城(香西本町)近くの激戦で、土佐の長宗我部元親軍に奮戦しましたが、戦死してしまいました。そして、佐藤城はいつの頃か廃城となったのです。



堀跡 キモンド一遺跡《伏石町》

写真は、城跡の南東コーナー付近から南の堀を見たもの。堀の両側には石垣が積み、堀の中にも石段を設けていました。このことから、堀は水路としても利用されており、水を西から東へ流していました。こうして水を管理することは、下流の水田を支配する上で重要なことでした。



佐藤城復元イラスト

《伏石町》

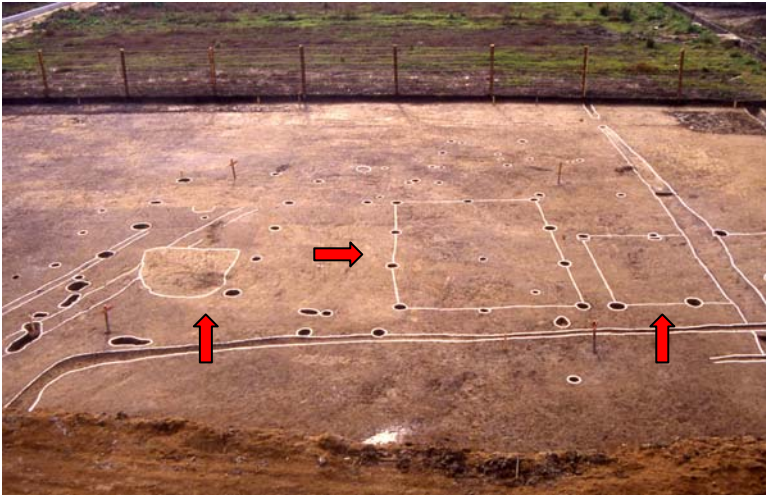
発掘調査の成果をもとに、佐藤城の南東コーナーを復元しました。

堀両側の石垣は、発掘調査では1～2段しか残っていませんでしたが、後世に持ち去られた可能性があり、ここでは堀上端まで石垣を復元しています。

また、木柵は、発掘調査では確認されていませんが、ほかの城跡を参考にして復元しています。

近世

発掘調査したもっとも新しい時代は、江戸時代です。さこ・長池Ⅱ遺跡では、掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとが見つかり、当時の農村にあった家か倉庫の跡と推測されています。また、蛙股遺跡かえるまたでは、河原石を積み上げた塚が見つかりました。



掘立柱建物跡 さこ・長池Ⅱ遺跡《林町》

矢印が掘立柱建物跡で、写真以外のものも含め、全部で6棟あります。平面は、4×1間、3×2間、3×1間のものが見られ、大きさは23~30㎡が多いです。



おりいし ごうづか
居石2号塚

蛙股遺跡《伏石町・太田下町》

東と西の2つに分かれ、写真は東側のものです。西側は8×5m、東側は9×7mの楕円形に近い平面です。東側のものは、中心に積み石があり、石の下からは2体分の人骨が出土しました。

編集後記

太田第2土地区画整理事業に伴って、発掘調査が始まったのが、平成元年のことです。それから約15年、発掘調査と多量の出土品の整理に追われましたが、やっと終了することができました。これもひとえに関係者をはじめ市民の方々のご理解とご協力によるものです。記して、感謝いたします。

今後は、調査成果や出土品をより多くの人に接することができるよう、機会をつくっていきたいと考えています。講演・展示などを希望の方は、ご連絡ください。

(S. K)

むかしの高松 第17号 2004.3.31

編集・発行／高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

電話 087-839-2660

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/>